

事項一一 反過激派関係雑件

五一〇 一月十日

在チタ加藤大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

社会革命党軍ノイルクツク攻撃、イルクツク
政府トノ休戦談判立消、同政府事実上消滅、
聯合國代表ノ同地撤去ノ願末報告ノ件

第一号

(一月十一日接受)

今次ノ政変ニ付テハ電信不通ノ為報告不可能ナリシヲ以テ
延引ナカラ茲ニ其ノ概要ヲ具申ス

十二月二十四日夜「イルクツク」停車場側ハ社会革命党軍
ノ占領スル所トナリ其ノ附近ニ駐屯セル一箇聯隊ハ之ニ左
祖ス

二十五日対岸市外ニ於テ政府軍ト革命軍トノ間ニ戦闘起リ
タルモ左岸停車場ニハ聯合國代表者ノ列車滞在セル為政府
軍ハ其ノ方面ヲ砲撃スル能ハズシテ中立区域ヲ設定センコ
トヲ要求シ来レリ仍テ聯合軍司令官「ジャンナン」將軍ハ聯
合國代表者ノ生命及鉄道運行保障ノ為停車場附近一定区域
ニ対シ政府軍ノ砲撃ヲ禁シ革命軍モ同区域内ニ於テ戦闘行

動ヲ取ルヘカラザル旨声明セリ

二十六日聯合國代表者ハ緊急処置トシテ「クラスノヤルス
ク」ヨリ「ムイソワヤ」ニ至ル鉄道ノ管理及指揮ヲ「チェ
ック」軍ニ委ネンコトヲ決議シ露國政府ノ同意ヲ経タルニ
依リ曩ニ革命軍ノ占領セル停車場ヲ「チェック」軍ノ手ニ
収ム

三十日払曉「セメノフ」軍装甲車停車場ヲ距ル東一哩ノ地
点ニ接近シ市外革命軍ヲ砲撃スルト同時ニ停車場裏手ニ於
テ戦闘ヲ開始シタルヲ以テ革命軍ハ鉄道線路ヲ破壊セリ聯
合國代表者ハ「セメノフ」及装甲車司令官ニ対シ各国ノ列
軍力撤去スル迄装甲車ヲ「イルクツク」ノ次ノ駅ヨリ前進
セシメサル様要求シタルモ時々前進スル為革命軍ハ其ノ都
度鉄道ヲ破壊セリ

依テ聯合國代表者ハ「セメノフ」軍ノ軍使ヲ招致シ外国官
民ノ撤去スル迄砲撃中止ヲ協約ス此日「セメノフ」軍戦利
アラズ約百五十名ハ革命軍ニ降り政府軍モ辛ウシテ市街ヲ守
備スル有様トナレリ一月一日午後本庄大佐ノ率ユル派遣隊

来着セリ

一月二日総理大臣代理ハ閣員二名ト共ニ聯合國代表者ト会
見ヲ求メ其席上ニ政府ハ「コルチャク」提督ニ対シ其最高
執政官タル職ヲ「デニキン」將軍ニ譲ランコトヲ勧告シ現
ニ「イルクツク」ニ在ル政府ハ地方的政府トナサンコトヲ
決シタル旨ヲ述ヘ次テ目下政府ニ反抗シツツアル社会革命
党ハ結局過激派ト化スヘキヲ以テ此際聯合國ノ積極的援助
ヲ期待シ得ヘキ哉ト問ヒタルニ付聯合國代表者ハ右ニ対シ
然諾ヲ与フル地位ニアラザル旨ヲ答ヘタル処総理代理ハ然
ラハ「コルチャク」始メ政府員及軍隊ノ自由撤退並ニ聯合
國保護ノ下ニ準備金ノ東方輸送其他ヲ条件トシテ革命軍ト
休戦方ニ付聯合國代表者ノ斡旋ヲ求メ度旨申出デタリ

是ヨリ先キ十二月三十一日「ニジネウジンスク」ニ新政府
樹立セラレタリトノ報道ニ接シタルヲ以テ聯合國代表者ハ
「チェック」軍其他外国軍隊ノ保護ノ下ニ準備金ヲ浦潮ニ
移シ聯合國及露國政府協議ノ上追テ何分ノ決定ヲ為ス迄之
ヲ保管スルヲ必要ト思考シ一月一日右ノ趣ヲ露國政府ニ提
議シ又「コルチャク」ノ生命ハ聯合軍ニ於テ出来得ル限り
之ヲ保護スルコトヲ議決シタルヲ以テ前記総理代理ノ申出

ニ対シ準備金及「コルチャク」ニ付テハ聯合國代表者ニ於
テ応分ノ手段ヲ取ルコトヲ諾シ休戦ノ斡旋ニ関シテハ単ニ
革命党側ニ休戦ノ意アリヤ否ヤヲ確メ果シテ休戦ノ意アリ
トセハ協議纏ル様成ルヘク援助ヲ与フルノ外何等責任ヲ取
ル能ハザル旨答ヘ其ノ夜半使節ヲ革命党本部ニ遣シタルニ
休戦談判ヲ開クコトニ同意シタリ

三日未明其ノ代表者ハ更ニ我カ代表者ト会见シテ同日正午
ヨリ二十四時間休戦シテ談判ヲ開クコトニ協議纏レリ同日
午前十一時革命党代表者来会シテ休戦中ハ何等敵対行為ヲ
取ラザルコト「イルクツク」ニ在ル金銀其ノ他ノ財産ヲ市
ヨリ東ニ移サザルコト「セメノフ」軍「イルクツク」以東
ニ撤退ノコト「スリユジャンカ」以西ノ鉄道及隧道ノ守備
ヲ新政府ニ委任スルコト政府軍武装解除ノコト「コルチャ
ク」及内閣辭職ノコト「セメノフ」カ「コルチャク」ヨリ
与ヘラレタル凡テノ位置ヲ去ルコト今回ノ戦争ニ関スル責
任者ヲ引渡スコト(但シ其ノ生命保障ノ下ニ)等要求条件
ヲ提出シ政府ハ之ニ対シ休戦中何等敵対行為ヲ取ラザルノ
措置ハ既ニ講ゼラレタルコト「セメノフ」軍ハ前線ヨリ当
地ニ至ル迄ノ間ニアル官吏士官軍隊等ノ撤退力保障セラル

ル迄止マルコト隧道ノ守備ハ聯合國軍隊ニ委任スルコト自ラ東方ニ去ルコトヲ希望スル軍隊ハ武装ヲ解除セザルコト「コルチャク」ニハ既ニ辭職ヲ勸告シタルコト(「コルチャク」ハ四日附電報ニテ其ノ職ヲ「デニキン」ニ譲ルコトニ決シ文書ニハ「ウエルフネジンスク」ニ於テ署名スヘキ旨通報シ来レリ)

内閣ハ東ニ撤退スヘキニ付当地ニ於テ地方政府ヲ樹立シ得ヘキコト「セメノフ」ノ地位ニ關スル要求ハ地方政府ニ取リ何等ノ必要無ク又其ノ目的ヲ達シ得ヘキヤヲ疑フコト先ツ戰鬪行為ニ出デタルモノハ革命党ナルヲ以テ政府ハ責任ヲ負フ能ハザルコトヲ答ヘタリ然ルニ革命党ハ政府カ休戰中ニ武備ヲ整フルノ意思アルヲ疑ヒ武装ヲ解除セザル軍隊ヲ東ニ移スハ明カニ東方ニ於テ更ニ吾人ニ對抗セントスルモノナルト同時ニ過激派ノ進入ヲ容易ナラシメ吾人ノ事業ヲ根柢ヨリ覆スモノナルカ故ニ最早談判ノ必要ナシト声明シ談判破裂セントシタルカ聯合國代表者ノ斡旋ニ依リ午後九時ヨリ兩派代表者ヲシテ直接会见セシメ論議ヲ重ネタルモ何等要領ヲ得ル所ナク更ニ休戰期間ヲ十二時間延長シ四日午後二時半重ネテ會議ヲ開クコトセリ同會議ハ政府代

表者ノ遅刻ニ依リ六時半漸ク開カレ聯合國代表者ハ感情ヲ去リテ誠意ヲ披瀝シ円満ナル解決ニ達センコトヲ希望シテ退場セリ右談判繼續中ニ於テ政府軍ノ降伏軍(不明)司令官ノ逃亡「セメノフ」軍ノ金銀搬出(日本兵及「チェック」兵ニテ之ヲ防止セリ右ハ聯合側代表者カ東方輸送方尽力シツツアル在「ニジネウージンズク」政府準備金ノ運命ヲ顧慮シタルカ為ナリ尚右ハ日本軍ノ公正ナル態度ヲ表明シ得タル点ニ於テ大局ニ鑑ミ頗ル機宜ヲ得タルモノト信ス)革命党拘禁者ノ東方輸送等ノ報道統々伝ハリタル為談判ハ午後十一時頃自然立消ト為リ午後十二時休戰ノ期限ニ達シタルモ戰鬪ヲ見ズシテ五日ヨリ政府ハ事實上消滅ノ姿トナレリ

四日(脱)會議ニ先チ革命党側ハ聯合國代表者ニ向ヒテ民意ヲ標榜スル今後ノ方針ヲ説明シタル後聯合國ノ態度如何ヲ質問シタルニ付聯合國ハ毫モ露国内ノ政争ニ干渉スルノ意思ヲ有セザルヲ以テ如何ナル政府カ樹立セラルトモ過激派ニ對抗スルノ方針ヲ取ル以上ハ之ニ對シ好意ヲ惜マザルヘキ旨ヲ聲明シタリ右ニ對シ十二月二十五日ヨリ一月五日ニ亘リ聯合國代表者ハ「ジャナン」將軍及我が軍事代表

者ト共ニ主トシテ本使ノ列車ニ於テ昼夜絶エズ會議ヲ開キタルモ四日ノ夜ニ至リ政府軍潰崩シテ政府消滅ニ歸シタルニ依リ一同撤去ニ決シ五日英國代表者並領事館員及居留民団出發六日日本使一行及仏國代表者出發シタリ但米國代表者ハ其ノ保護ノ下ニアル二百ノ婦女子ヲ速ニ安全ノ地点ニ移スノ必要上三日出發セリ
松平ヘ電報済ミ

五一 一月十五日 在チタ加藤大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャク政府崩壊後ノ新事態ニ対処スベキ
セメノフノ見解ニ付報告ノ件

(一月十七日接受)

一月十二日「セメノフ」來訪時局対応策トシテ國民會議ヲ招集シタキモ新ニ選舉ヲ行フ時ハ急ノ間ニ合ハザルヲ以テ既ニ成立セル各団体ノ代表者ヲ選出セシメ直ニ會議ヲ招集セントスル考ナリト語レルニ付右ハ個人トシテ之ニ賛意ヲ表シ置キタリ尚「セメノフ」ハ現存ノ「アタマン」司令部ヲ擴張シテ「トレチャコフ」「コンシン」「ブリュシキン」等ヲ招キ財政經濟ヲ掌理セシメ度キ考ナリト語レリ且彼ハ

在日本露國大使トノ間ニ意思ノ疏通ヲ計ル為近日「セメノフメルリン」ヲ日本ニ遣スヘシト謂ヒ特ニ在北京露國公使カ当方面ノ事態ヲ知ラサル為自分ノ事業ノ成功ヲ妨クトテ実例ヲ挙げテ憤慨セリ

松平ヘ電報済ミ(奉天大正九年一月十六日后七、七)

五二 一月二十二日 在チタ鳥居翻譯官ヨリ
内田外務大臣宛

コルチャクヨリセメノフニ政權引渡ニ關スル
命令書訳文進達ノ件

智送第一号 (二月五日接受)

大正九年一月二十二日

在チタ市

外務省翻譯官 鳥居忠恕(印)

外務大臣子爵 内田康哉殿

本年一月二十日拙電第九号首題ノ命令書全文反訳別紙為御参考進達致候 敬具

追テ本命令全文ハ一月二十一日政府機關新聞「ウオストーチヌイ、クリエール」ニ掲載セラレ此ノ命令ノ下段ニ本官(セメノフ)ハ此ノ讓渡命令ニ依リ露西亞東方ノ軍

事及民政ヲ行使ス云々ト附記有之候為念添テ具申致候也
(別紙)

コルチャクヨリセメノフニ政權引渡ニ関スル命令書訳文

千九百二十年一月四日於「ニヂネ、ウジンスク」市
最高執政官命令

本官ハ露西亞ノ主權ヲ南露西亞軍隊總司令官陸軍中將「デニキン」ニ讓渡ス予定ナリシヲ以テ「デニキン」ヨリ何等指示アル迄我カ全露西亞ハ露西亞東方ト分離セザラシメムカ為該地方ニ於ケル国家ノ防衛ヲ支持スルノ目的ニ基キ第一、露西亞最高執政官ノ統治スル露西亞東方ノ全区域ニ於ケル軍事及民政ノ全權ヲ極東總軍及「イルクツク」軍管區司令官陸軍中將アタマン「セメノフ」ニ讓渡シ、第二、其ノ管区内ニ於ケル施政ノ全權能ヲ行フタメ國政機關ヲ組織スルコトヲ寄托ス

最高執政官海軍將官「コルチャク」
内閣議長 「ペペリヤーエフ」

五二三 一月二十四日
在ハルビン松島總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャクヨリセメノフニ対シ最高執政官ノ

右松平へ済

(長春中継大正九年一月廿四日後七、〇〇)

註1 「タスキン」ハ民政補佐官

註2 別電ハ記録中ニ見当ラズ前掲一月二十二日在チタ島居翻譯官發内田外務大臣宛智送第一号参照(五一二文書)

五一四 一月三十一日
在ハルビン松島總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャク提督ヲ反对党ニ引渡セシ事情ヲ説
明セルジャンナ将軍ノ電報ニ付報告ノ件

第八六号

(二月一日接受)

哈爾濱滞在中ノ日英仏三国外交代表者ヨリ「コルチャク」提督ヲ反对党ニ引渡シタル事情理由ヲ質問シタルニ対シ「ジャンナ」将軍ヨリ左ノ通り電報シ来タレリ全文郵送ス
一月二十三日附電報要領

「チェック」軍ハ多大ノ困難ヲ冒シテ「コルチャク」提督ヲ「イルクツク」ニ護送シタルガ同地ニ於テ列車ハ多数ノ反对党側ノ軍隊ニ取り巻カレタリ而シテ武力ニ訴フル事ハ不可能ナリキ蓋シ(不明)鉄道ノ同盟罷業ハ既ニ開始セラレタルノ時ニ当リ提督自身モ又責任ヲ負フベキ事態ヨリ提

一一 反過激派関係雑件 五一四 五一五

権委任ニ付在チタ古沢副領事報告ノ件

第五四号

(一月二十五日接受)

古沢ヨリ左ノ通

外務大臣へ転電アリタシ

第二六号

「タスキン」ノ語リタル所ニ依レバ「コルチャク」ガ「セメノフ」ニ最高執政官ノ權ヲ委任スル旨ノ命令ハ十九日密使ノ手ニ依リ「セメノフ」ニ手渡シサレタル趣ニテ二十日附總司令官命令第五号ヲ以テ別電ノ通廿一日發表セラレタリ本件ハ最も重要ナルモノニシテ之ニ依リ「セメノフ」ハ極東露領並其關係地方ニ於テ正式ニ最高執政官ヲ代表シ得ベク先ニ「ホルワット」ガ命令第五一四(不明)号ヲ以テ其一部附屬地帯ノ露人ニ關スル国家の主權ヲ完全ニ行使ス云々ノ声明ニ対シ「セメノフ」側ガ同鉄道ヲ其ノ支配下ニ置ク能ハザルガ如キ關係ニアリ為ニ政局上統一ヲ欠クノ虞ナキ能ハズト窃ニ顧慮シタル事情モ追々ニ改善セラレタルモノト云フヲ得ベシ唯此際「ホルワット」ガ「コルチャク」ノ命令ヲ尊重シ果シテ「セメノフ」ニ聽從スベキヤハ尚頗ル疑問ナリト云フベシ

督ヲ救出スル為「チェック」兵ヲ犠牲ニ供スルノ權能ハ余ノ有セザル所ナレバナリ尚一月四日提督自身政治(脱)中央軍ヲ政治機關ト承認シ之ト交渉方ヲ欲シタルヲ以テ是ニ引渡サレタリ福田大佐ハ引渡ニ反对シタルモ兵力ヲ使用セザリキ右反对ハ純然タル理想論ナルト同時ニ自己ノ責任ヲ擁護スルヲ唯一ノ目的トスルモノナリ要スルニ「チェック」ハ聯合國代表者ノ希望シタル最善ノ努力ヲナシタルモノナリ

五一五 一月三十一日
在ハルビン松島總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

浦潮ニ於ケル政權復活ノ構想ヲ抱ク旧オムス

ク政權閣僚ヨリ日本援助要請ニ付請訓ノ件

第九一号

(二月一日接受)

一月三十日前露國政府農務大臣「ペトロフ」及内閣書記官長「ギンス」來訪社会革命党ノ政權掌握ハ過激派ガ權力ヲ樹立スル階梯ニシテ自分(ペトロフ)ガ「イルクツク」司令官「カラシボコフ」(脱)ハ過激派ニ政權ヲ譲リ渡ス事ハ社会革命党ノ予定ノ行動ナリト言明セリ故ニ浦潮其ノ他ニ於テ社会革命党ガ政權ヲ掌握スルニ至ラバ血塗ラズシテ

六二九

過激派ノ天下トナリ而シテ過激派ハ一部人士ノ考フル如ク決シテ政策ヲ緩和シ得ベキモノニアラザルヲ以テ露国ハ此処ニ終焉ヲ告グルコトトナリ誠ニ遺憾ノ至リナルニ付切メテ沿海州丈ナリトモ精神のニ露国トシテ是ヲ存在セシメ他日過激派ノ勢力失墜スル時機ヲ俟ツテ再挙ヲ計リタキモ是トテ聯合國軍ト日本ノ援助ナキ限り到底企図スベカラザル所ナルガ若シ日本政府ニシテ過激派勢力ノ進展ヲ阻止スルノ必要上極東ニ於ケル反過激派政府ヲ援助スベシトセバ目下当地ニアル陸軍海軍大藏農務各大臣又ハ日本ニアル総理ト協議ノ上例ヘバ浦潮ニ於テ前政府ヲ復活セシムルノ策ニ出デンカト思考シツツアル処日本政府ハ右計画ニ対シ相当ノ考量ヲ加ヘラルベキヤ否ヤ若シ然リトセバ自分等ハ暫ク此ノ地ニ滞在シテ日本政府ノ対西比利亞政策ノ御決定ヲ待チ居ルベシ之ニ反シスル計画ハ最早日本政府ノ援助ヲ期待シ得ズトセバ各自分散スルノ外無キニ付此ノ点ニ関シ帝國政府ノ御意向ヲ承知シタシト申出デタルニ付何分ノ儀御電報アリタシ

露国政府ハ何人ニモ政權ヲ譲リ渡シタル訳ニアラザルニ付大正七年拾一月拾八日ノ国家権力ニ関スル臨時大臣會議決

訳別紙為御参考進達致候 敬具

(別紙)

一月三十日セメノフヨリ大井司令官宛電報訳文

日本政府ニ援助要請ノ件

一九二〇年一月四日付「コルチャク」提督ノ命ニ依リ予ハ露西亞主權ノ統治スル露西亞極東ニ於ケル文武全權ヲ讓受ケタルニ付テハ吾カ終始不変ノ友邦ニシテ又正義アル日本ニ対シ其ノ帝國政府及國民ニ向ツテ露西亞カ正義誠道ニ基キ再ビ強國ヲ興シ国内ヲ整備セムトスルノ事業ニ日本帝國軍ハ公明ニシテ且友愛ナル援助ヲ与ヘ勞苦ト犠牲ヲ致サレシハ衷心ヨリ感謝スル所ナリ

露西亞極東ニ於テ我カ國家ヲ救ヒ其ノ再興ヲ計ルニ当リ財政及通貨ノ紊乱ニ逢ヒ國家組織上是レ極メテ困難ノ事ニシテ加フルニ他ノ聯盟軍幾分ノ撤退ハ内政ヲ益々錯綜セシムルアリ依ツテ予ハ國民代表者ト力ヲ一ニシ官僚臭味ナキ統治機關ト精兵トニ頼リ重大ノ任務ヲ遂行セムコトヲ固ク決心シ茲ニ日本政府及吾人ノ友愛ナル日本國民ハ予及吾カ國家ヲ念フ所ノ民衆ニ対シ吾人カ正義誠道ニ基キ内政ヲ整ヘ國家ヲ興サムトスル忠誠ナル事業ニ援助ヲ与ヘラルヘシト

定第六条「オムスク」佐藤免大臣宛第九号参照)ニ依リ大臣會議ハ法律上政權ヲ有スルコト及「セメノフ」ノ下ニアル臨時代行機關ノ望無キコト等ニ関スル両氏ノ説明ハ「オロゴツキー」ガ三十日松平部長ニ語リタル所ト同様ニシテ詳細ハ松平部長ヨリ電報ノ答
松平へ転電セリ

五一六 二月一日 在チタ島居翻譯官ヨリ
内田外務大臣宛

極東代行統治機關セメノフ將軍ヨリ日本政府
へノ援助依頼電報訳文進達ノ件

智機送第三号 (二月十六日接受)

大正九年二月一日

在チタ市

外務省翻譯官 島居忠恕(印)

外務大臣子爵 内田康哉殿
首題ノ電報ヲ一月三十日「セメノフ」將軍ヨリ大井司令官經由我カ政府ニ発信致シタル趣ヲ以テ「タスキ」民政補佐官ヨリ其電報原書ノ手交ヲ受ケ候ニ付一月三十日拙電第二十三号ヲ以テ御參考トシテ大要具申致置候右電報全文反

衷心ヨリ期待シ居ルコトヲ告白ス且日本帝國政府及其ノ國民ハ吾人ノ國家ヲ破壊スル過激派トノ戦並ニ紊乱セル財政及經濟界ノ救済整備ニ関シ亦之ヲ援助セラルヘシト囑望ス又友愛ナル日本ハ露國ニ如上ノ援助ヲ与フルニ当リ國家ノ觀念ヨリシテ常ニ其ノ正義ト潔白トヲ予ハ篤ク信シ此ノ援助ニ関スル重大ノ國費ハ之ヲ日本及日本國民ニ返還スルハ至当ニシテ又緊要ノコトト思考シ返還ニ就テハ露國主權ノ前ニ之ヲ稟議シ露國民ト共ニ友愛ナル援助ニ対シ誠意ヲ以テ之ヲ感謝セムトスルコトヲ声明スルヲ予ノ義務ト信ス

五一七 二月五日 青島軍參謀長ヨリ
福田參謀次長宛(電報)

蒙古兵ノ統一指揮ニ関スルセメノフト中国
側トノ會談ニ付報告ノ件

青電第八号 (二月九日外務省写接受)

「セメノフ」腹心ノ部下「サードリン」大佐ハ二月一日來青セリ其後「サードリン」升允會見ニ関シ工藤ヨリ聴キ得タル要旨左ノ如シ

「サードリン」ト升允ハ本日迄ニ前後三回會見セリ最後ノ會見ハ二月一日ニシテ極メテ秘密ニ恭親王ノ關係シアル在

青島礼賢書院内ニ於テ行ハレタリ同席者ハ升允側、恭親王、升允及其息子芳乃宣、羅振玉、高天元(旧書院院長)、李德純等ニシテ「セメノフ」側ハ「サードリン」大佐及同伴セル廖容、李容肅等ノ三人ナリ

「セメノフ」側ノ主張ハ概ネ左ノ如クナルモノノ如ク此レニ対シ升允側ハ絶体ニ反对シ「セメノフ」側提出条件第一項ニ於テ既ニ意見ノ一致ヲ見ズ、玆ニ於テ今回ノ会见ハ全然不調ニ終リ「サードリン」大佐一行ハ本日大連ニ向ケ出発帰途ニ就ケリ

「セメノフ」側主張条件

- 一、蒙古兵ノ統一ヲ升允ニ依ッテ行ヒ其統一軍ヲ「セメノフ」ノ指揮下ニ置クコト
- 二、之レニ要スル資金及武器ハ「セメノフ」ヨリ交附ス
- 三、升允ハ統一セル「セメノフ」軍ノ最高顧問ノ地位ニ置クコト

五一八 二月七日

在本邦露国大使ヨリ
壇原外務次官宛

露国船アリヨール他二隻ノ乗客及乗組員ノ処

置ニ関シ援助懇請ノ件

爾賓ノ如キ露国官庁ノ所在地ニシテ彼等ノ生命上ノ危険ナキ最モ近キ個所ニ、或ハ彼等ノ希望ニヨリテハ近距離ニアル支那諸港中彼等ノ好ム所ニ輸送致度候

(二)「アリヨール」及ビ「ヤクト」両運送船ノ乗組員及ビコレヲ両船ソノモノニ関シテハ乗組員自身両船ヲ貿易上ノ目的ニ使用シテ自ラ其生活費ヲ得ルコトヲ得ベシト存ゼラレ候コレガ為ニハ「アリヨール」ヲ少シク修繕シマタ両船ニ最初ノ航海ニ要スル約五百噸ノ石炭ヲ供給スルコト必要ニ御座候

「アリヨール」及ビ「ヤクト」ハ漸クニシテ二月十一日迄ノ分ノ食糧ヲ蓄フルニ過ギズ、又狹隘ナル船中ニ極メテ多数乗込ミ居ル乗船者中ニ病氣流行ノ虞アレバ本件ノ解決ハ極メテ火急ヲ要シ候以上開陳セル事情御諒承ノ上、貴官ガ本問題ヲ出来得ル限り速ニ御審議被下候ハバ本官ハ感謝ニ不堪次第ニ御座候 敬具

大正九年二月七日

露国特命全權大使

バジール、クルペンスキー

外務次官

(二月七日接受)

拝啓陳者貴官ノ既ニ御承知ノ如ク貴国ニ露国船三艘即チ敦賀ニ運送船「アリヨール」及ビ「ヤクト」、門司ニ義勇艦隊汽船「モギリヨフ」来航致居候

コレニ関聯シテ目下コレヲ諸船乗客ヲ将来如何ニナスベキカテフ極メテ重要ナル問題起リ居候彼等ヲ浦塩斯德ニ送還スルハ同地ガ彼等ノ自由及ビ生命ニトリテ極メテ危険ナル地ナレバ到底不可能ニ御座候然ルニ一方当大使館ニハ該乗客ニ援助ヲ与フベキ何等ノ資金モ無之候

サレバ本官ハ貴官ガ該問題解決ニ御助力ヲ与ヘラルルノ目的ヲ以テ該問題ニ就キ御配慮ヲ煩ハセラレンコトヲ偏ニ願上候

就テハ該問題ノ最善ナル實際的解決方法ニ関シ左記愚見開陳仕候

(一)第一ニ貴国ノ為ニ厄介者ナラザルダケノ蓄財アル該三艘ノ乗客ニハ凡テ貴国ニ上陸ヲ許可セラルルコトヲ得バ上陸後ハコレヲ乗客ハ自力ニテ生活方法ヲ講ズルコトヲ得ベク候

(二)又其他ノ乗客ニシテ乗組員以外ノモノニ就キテハ或ハハ

壇原正直殿

五一九 二月九日

内田外務大臣ヨリ
在ハルビン松島総領事宛(電報)

ペトロフ等ノ日本ノ援助要請ニ対スル応答振

ニ付回訓ノ件

第四二号

貴電第九一号ニ関シ「コルチャク」政府ノ倒壊後ニ於ケル西比利亜政情ハ全然不安定ニシテ事實上ニ於テモ其ノ中心勢力ト認ムヘキモノ無ク将来ノ帰趨甚ダ懸念ニ堪ヘザル今日御来示ノ如ク進テ一党一派ノ援助ヲ企図スルガ如キハ固ヨリ好マシカラザル次第ニ付貴官ハ右様御舍ノ上此際帝國政府ハ「ペトロフ」等ノ衷情ニハ同情ヲ有シ露国ノ秩序恢復ヲ熱望スルコト勿論ナルモ内政上ニ立入り干涉スルガ如キ嫌アル举措ハ可成之ヲ避ケ度所存ナル旨可然応答アリタシ

右為參考松平ニ転電アリタシ

五二〇 二月九日

内田外務大臣ヨリ
在浦潮松平政務部長宛(電報)

ロザノフニ対スル棉花代金返付要求問題ニ関

シ余リ立入ラザル様訓電ノ件

第二四号

貴電第六〇号ニ関シ

「ロザノフ」ガ正金銀行ヨリ引出シテ所持セル棉花代金百万円ノ返付方ニ関シテハ我方ニ於テ直ニ「メドウエシヨフ」ノ要求ヲ容レ「ロザノフ」ニ対シ其返付ヲ勧告スル時ハ直ニ「メ」一派ノ政權掌握ヲ承認シタルガ如キ形トナリ目下ノ事態ニ鑑ミ尚早ノ嫌アルノミナラズ我方トシテ余リ立入ラザル方可然ト認メラルルニ付差当リ返付ヲ勧告スルコトハ之ヲ見合セ唯「メ」ノ要求ヲ其儘「ロ」ニ対シテ取次グ丈ニ止メ置カレ度シ

五二一 二月十日

浦潮派遣軍參謀長ヨリ
福田參謀次長宛（電報）

セメノフニ送リシカルムイコフノ訣別ノ辞ニ

関シ報告ノ件

浦參謀第一四〇号極秘

（二月十三日外務省写接受）

二月九日「カルムイコフ」ガ「セミヨノフ」ニ送リシ訣別尊敬スル「グレイリー」ヨ、各方面ニ起リツツアル忌ムヘキ事變ト黒竜烏蘇里地方ニ於ケル一般ノ状況ヲ顧慮シ予ハ

予等ノ極東地方ニ於テ始メシ戦ヲ好結果ヲ以テ継続スル為ニハ極力基幹部隊ヲ保存シ機ヲ見テ再起シ得ルノ態勢ヲ占メ置クヲ必要トスルノ結論ニ達セリ依リテ烏蘇里並國際的關係ヲ攻究セシ結果予ハ為シ得ヘキ根拠地トシテ朝鮮ノ北境カ黒竜河口尼港カ樺太島カ或ハ「カムサツカ」カラ選定シ尚駐留シアル日本人ノ援助ノ下ニ河川ノ氷結シアルコト並「トワリシチ」（過軍）ノ團結未タ強固ナラザルトニ乗シ義勇兵ト共ニ其何レカノ地ニ赴ク事ニ決心セリ予ハ出發前当地國立銀行ニアル三七布度ノ銀塊ヲ携行セントス兄ハ今後蒙古ニ赴クヘキヲ予想シ為シ得ル限り兄ト密接ナル連繫ヲ保シ兄ト共ニ祖国ノ復興ヲ図ルハ予ノ任務トス願クハ兄ノ意見ヲ述ヘラレン事ヲ、ヨシ兄ニシテ同意セラルルニ於テハ茲ニ幸福ナル再會ノ日ヲ待チツツ袂ヲ別タン

註 カルムイコフハ「コサツク」ノ「アタマン」ナリ

五二二 二月十三日

日本外務省ヨリ
在本邦露國大使館宛

露國汽船アリヨール及ヤクートノ船客上陸方

ニ関シ回答ノ件

帝國外務省ハ二月八日「クルペンスキー」閣下來省申出ニ

係ル露國汽船「アリヨール」「ヤクート」乗客上陸方ノ件

了承早速内務省ニ及協議タル処同船客中成規ノ旅券及所持金ヲ有スル者ハ上陸ヲ許可スルモ旅券ヲ所持セザル者ニシテ日本内地ニ滞留セムトスル場合ニハ一人千五百円以上ヲ所持スルカ又ハ生活支持ニ付確實ナル引受人アル場合ニ限リ之ヲ許可スヘク又外國渡航ノ為内地ヲ通過セムトスル者ハ規定ノ所持金ヲ有シ直チニ目的地ニ出發スルヲ条件トシテ許可スヘク又旅券ヲ要スル地方ニ向フ者ハ予メ其國領事ノ諒解アルコトヲ必要トス尚是等外國渡航者ニシテ相当期間内ニ出發セザル者ハ退去ヲ命ズルヤモ計リ難シ將又以上各事項ニ該當セザル者ニ付テハ貴見ノ如ク何レヘカ任意航スルヲ可トスル旨同省ヨリ回答アリタリ尚其乘客渡航希望地其他參考トナルヘキ事項モ併セテ詳細通牒ヲ得度趣申添アリタリ

大正九年二月十三日

於東京

註 添附ノ仏訳文ヲ省略ス

五二三 二月二十二日

在ブラゴヴエスチェンス
ク山口領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

一一 反過激派關係雜件 五二三 五二四

セメノフ支援中止及對露通商關係ヲ密接ニス

ルヲ可トスル旨稟申並政府ノ方針問合ノ件

第二九号

（二月二十八日接受）

露國極東ノ政府急激ナル大變化ヲ来タシ露國民ノ帝國ニ對スル感情甚シク惡化シ来リタル時ニ當リ愚見ヲ以テスレバ帝國政府ニ於テ領土の野心無キ限り毫モ露國民ノ信任無キ「セメノフ」輩ノ援助ヲ依然繼續シテ大勢ニ逆行スルガ如キハ最モ無謀ノ策ニシテ此ノ後軍隊撤退ヲ声明シ勞農政府ト良好ナル關係ヲ保持シ露國ニ最モ欠乏セル物資ヲ供給シ通商關係ノ密接ヲ謀ルヲ以テ最モ機宜ニ適スルモノトナスモノナルガ帝國政府ノ露國特ニ西比利ニ對スル方針那邊ニアルヤ本官心得ノ為至急何分ノ御訓電ヲ請フ
松平へ転電済

五二四 五月十九日

在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

ホルワット將軍ノ内命ヲ受ケタル其股肱松平

部長ヲ来訪シ日本政府ノ對露方針ヲ問質ノ件

第二二〇号

（五月二十日接受）

「ホルワット」將軍ノ股肱ニシテ前極東代官府民政長官タ

リシ「グルハレヨフ」ハ同將軍ノ内命ヲ受ケ哈爾賓ヨリ当地ニ来着五月十九日本官ヲ来訪シ帝國政府ノ對露政策ヲ問ヒ殊ニ日本ガ一方「セメノフ」ヲ援助シツツ他方「セ」ト氷炭相容レザル当州「ゼムストウオ」政府ヲ支持セル如キ感アル為日本ノ援助ニ依リ露國ノ復興ヲ計ラントスル吾人有志ハ其ノ何レニ適從スベキカラ知ラズ斯クテハ徒ニ内乱ヲ醸スノミニシテ現ニ東支鉄道ノ如キ「セメノフ」及「メドウエジョフ」ノ双方ニ挾マレ甚ダ困惑シツツアリ就テハ此ノ際日本当局ノ御意嚮ヲ確メ度シ云々ト申出デタルニ付本官ハ適宜日本ノ立場ヲ説明シ尚「グルハレヨフ」ノ口調ガ日本ノ援助ヲ得バ右党人物ヲ集メテ（脱）アゲ度キ様ニモ見エタルニ付今日ニ於テ斯ノ如キ挙ヲ為スニハ既ニ時機ヲ失シ居ル旨ヲ注意シ尚「ホルワット」北京行ノ目的及支那政府顧問転任説ノ真否如何ヲ尋ネタルニ「グ」ハ左ノ通り答ヘタリ

「ホルワット」ノ北京行ハ鮑貴卿及張作霖等地方官憲ガ露國軍司令部占領軍警解任等横暴ノ行動ヲ為シ自分ヲシテ同地ニ留マル能ハザル如キ仕打ニ出デタルニ付中央政府ノ意嚮ヲ確ムル為赴キタル次第ナルガ其ノ結果ハ右支那地方官

外務大臣子爵 内田康哉殿

旧「オムスク」政府外務次官ノ資格ヲ以テ予テ極東ニ簡派セラレ当地ニ駐在シ居リタル「クレム」ハ本年一月中「ホルワット」將軍ノ命ヲ受ケ本邦ニ渡航四月頃迄滞在致居リ帝國ノ對露方針ニ付何等カ期待スル所アリシ模様ニ有之候ヒシモ爾來別ニ之カ決定ヲ見ザリシヲ以テ本邦ヲ辞シ北京ニ向ヒ「ホルワット」將軍ニ合シタル由ニテ同人ガ帰來京城及北京ヨリ本官ニ對シ別添写ノ通り書信ヲ送り越シ「ホルワット」將軍北京行ノ動靜ヲ開陳致居候右ハ素ヨリ「ホルワット」將軍側ノ主張ニ過ギサル次第ナガラ何等御參考トモ可相成ト思考候ニ付玆ニ及報告候 敬具

（附屬書一）

四月七日附旧オムスク政府外務次官クレムヨリ松平政務部長宛 書翰写

My dear Mr. Matsudaira,

Seoul, April 7th, 1920.

I had to wait a long time till the news I had asked for through your kind medium reached me from Harbin. This morning only I got at last a letter from my sec-

ノ行動ハ全然中央政府ノ意図ニ添ハザルコト明瞭トナリ「ホルワット」ハ反ツテ北京政府ヨリ一層信任ヲ得其ノ内帰任ノ筈五月二十日ノ北京ノ株主總會ニ於テハ多分東支鉄道長官トシテ再選セラルル模様ナリ顧問問題ハ最初支那側ヨリ「ホルワット」ノ敬遠策トシテ名譽アル地位ヲ提供セントシタルモ「ホ」ハ断然之ヲ拒絕シ今日迄長官ノ職ニアル次第ナリ云々

哈爾賓、北京へ転電セリ

五二五 五月二十五日

在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛

ホルワットニ對スル過激派の反對運動及中国側ノ該運動悪用等ヲ通報シ聯合國ノ「ホ」將軍援護ヲ希望スル旧オムスク政府外務次官書翰写送付ノ件

附屬書一 四月七日附右書翰写

二 四月二十日附右書翰写

機密軍政送第四一號

（五月二十九日接受）

大正九年五月二十五日

浦潮派遣軍政務部長 松平恒雄（印）

retary Alferiev, General Horvath having omitted to inform him earlier of my arrival at Seoul and of my request to be informed of the state of thing at Harbin. I have to thank you once more very much for having wired to your Consul-General.

Thinking that it might interest you to know what has been going on at Harbin, I shall give you an extract of Alferiev's letter.

The center of the opposition to General Horvath was the so-called "United Conference of the Professional Unions". This socialistic-bolshevik organization and its paper "Vpered" (Forwards) were considered as illegal, but both were very popular among the workmen and, besides, the Chinese were playing a double game supporting the said "Conference" at each meeting of which a Chinese representative used to be present. This was evidently the chief reason why General Horvath refrained from taking any active measures against this organization and its paper. The role of the Chinese in this

matter is quite clear: through "our friend" Li-Kia-Ao they had entered into contact with the Vladivostok rulers and were supporting the "Conference" as long as they thought it necessary for their purpose, i. e. for fomenting trouble in order to have a reason to intervene. Our foolish people did not understand this and thought the Chinese had taken faith in their socialistic ideals. They found out the truth only when the Chinese flags were hoisted on the Russian offices and the Chinamen became extremely arrogant.

The strike on the railway broke out on March 14th. At first not much attention was paid to it, as it seemed that it was not serious. But soon it appeared that the strike was rapidly spreading, chiefly owing to the miserable financial state of the railway, the workmen and employees not having been paid for 2 and partly even for 3 months! The electric light, the telephone &c. stopped working and the streets were covered with pamphlets abusing General Horvath and the higher

railway officials. This lasted till the Chinese threw off their mask and occupied the headquarters of the railway guards pulling down the Russian flag. A little later the telephone and electric light stations &c. were also occupied by them.

Meanwhile General Horvath had received from Bao (or "Pao"?) per telegraph an ultimatum to give up his administrative power in 24 hours. The General did not reply to this telegram, and just 24 hours later the Chinese occupied all the Russian Government offices. So the General had been deprived of his administrative functions, though remaining Director-Manager of the railway. At the same time the Chinese changed their attitude towards the "Conference", as they didn't want it any more. Just while Alferiev was writing to me, he heard that some members of the "Conference" as well as one named Pompiansky—a representative of the Vladivostok Government—had been arrested by the Chinese. If this is true, it would be a good lesson for

our silly socialists.

It seems, further, that some agreement has been reached between Horvath and the Chinese authorities and that the Russian police and railway guards will be somehow reestablished. There is one question only to which I find no answer in Alferiev's letter, namely: what role our Consulate-General at Harbin has been playing in all these events.

Yesterday I received a telegram from General Koblhof informing me that Horvath is going to Peking and wishes me to accompany him. So I am leaving to-morrow evening Seoul for Mukden where I shall meet the General. I don't know what for he is going to the Chinese capital, but I suppose he wants to confer with our Minister, Prince Koudacheff. There is a rumor that the board of directors of the railway is to be transferred to Peking, but I am not sure it is so. I will let you know from Peking.

In the Oussuri and Amour Districts matters seem

to go from bad to worse. I suppose your people will have seen (the necessity?) to take drastic measures to check the ever growing indolence of the reds. The butchery at Nicolaievsk is most disgraceful and revolting. Accept my sincerest condolences for the sakes your galant troops have endured.

I have no direct news from Transbaikalia, but it seems so far that your troops have not yet started evacuating that province. Still the position of General Voitzenhovsky and his small army is rather critical and it is to be expected that soon or late they will be obliged to withdraw into Manchuria. I am at a loss to foresee how General Horvath will be able to deal with all these 40 to 50 thousand of people including refugees with women and children. He is hardly able at present to provide for a quantity of ex-government officials, officers of all ranks &c. who are daily applying to him for assistance. Something must be done to solve this problem. The Allies have morally no right of turning

away from these people when they have supported and encouraged the whole time as their faithful allies who were fighting for the common cause. It would be treason to do so. It is disgusting to witness how the poor officers of Kolchak's Army and other refugees who are running away from Russia for their lives are treated, how all the Allied countries are doing their utmost to get rid of them, how it is almost impossible for them to get their passports visé even when they intend going to the south of European Russia to join Denikin, how they are required to produce large sums of money when entering any country &c. &c.— I think it is really the duty of the Allies to provide for these poor wretches who have lost everything, who are homeless, who have suffered so much.....This question ought to be taken up at once by the Allied Governments and I think your generous country should take the lead in this matter so much the more, as being the next neighbours of Siberia, you know best of all how matters stand. When

and at Harbin. What he told me confirmed, more or less, what my young secretary Aferiev had written and what I had already communicated to you. He only denied positively the rumour as if the Chinese had changed their attitude towards the so-called "Conference of Professional Union" and that they had arrested the famous Pompiansky and some other members of the Conference.

The Chinese had long ago begun encroaching upon the railway. When the Government had been overthrown at Vladivostok, the socialists of Harbin, chiefly railway workmen and lower employees summoned General Horvath to submit to the new socialistic-Zemstvo Government of Vladivostok, what the General refused to do, explaining to the people that neither the Zemstvo, nor any other local government had any right to interfere with territory of the railway, the latter being the property not of any party, but of the whole Russian nation. Only the government that will be recognized by

I will have consulted General Horvath, I shall write you more about this question.

Meanwhile let me thank you once more most heartily for all your kindness, and believe me, as ever.

Yours very sincerely,

(Signed) W. Klemm.

(附屬書11)

四月二十日附旧オムメン政府外務次官メンデル松平政務部長宛書翰

Peking, April 20th, 1920.

My dear Mr. Matsudaira,

I am writing to you, as I promised in my letter from Seoul, to tell you what I have heard from General Horvath and how matters stand at present.

I met the General at Mukden and found him very worried and rather bad looking. He had been ill some time before and had not quite recovered as yet, above all he felt very uneasy about the Chinese way of dealing with him and about their behavior on the railway

the Allies will be entitled to it. The workmen, therefore, threatened to strike.

Meanwhile Pompiansky had arrived from Vladivostok and the above-mentioned "Conference" had been organized. The local Chinese authorities, especially a general named Chang Huan-lian, immediately took this opportunity to raise their claims. They insisted on having more Chinese members in the Board of Directors in order to be better informed of the state of things on the railway, promising in return every assistance to the railway and the general personally. But when Horvath decided to take strong measures against the "Conference", the Chinese most emphatically objected to it, always pretending that it was solely their right and duty to keep up order, as the guarding of the railroad had been entrusted to them by the Allies. They summoned Horvath in writing to give up his political powers, to which, having no support, he was obliged to comply, doing it, however, under a written protest.

At the same time the Russian railway guards and police were disarmed by the Chinese and disbanded.

Horvath desires positively (確) the fact that the workmen and employees had not been paid for two or more months; he says there were outstanding payments no more than for two or three weeks and that there was absolutely no economic reason for striking. The workmen had not ever tried to put forward any economic claims. The whole matter was purely political, the minority, as usual, having terrorized the majority and enforced the strike, and the Chinese having openly encouraged the strike in order to provoke disturbances to have a good pretext for taking not only the administrative power, but possibly also the management of the railway in their hands.

So things went from bad to worse and Horvath did not see another way out of the difficulties as going to Peking to confer with our Minister and with the central Chinese authorities. At Mukden the General paid a

sists upon returning to Harbin, the local Chinese authorities might be able to encourage some anarchists simply to kill him, saying afterward that every thing had been done to persuade the General not to expose himself to such a danger, but he had not listened. Thus they might decline any responsibility on their part. In fact, Chang Tso-lin spoke a good deal about his being anxious for the General's safety.

I have no doubt that the Chinese have decided to remove Horvath by all means from Harbin and from his post altogether considering him as the chief obstacle on their way of taking possession of the railway. The General himself is quite powerless to struggle against them and only foreign energetic assistance and protection could frustrate the Chinese design. Don't you think it is the duty of the powers who pledged themselves to safeguard the Russian interests to check the Chinese appetite? I am sure Horvath can't return to Harbin under the present circumstances, the dangerous elements

visit to Chang Tso-lin, who as you know, is the *de facto* ruler of the whole of Northern China. Chang told Horvath straightway that they want him to leave Harbin at least for some time, till they will have restored order there, and that, to this end, he will be offered at Peking the post of Adviser or Councillor to the Chinese Government for railway matters.

In fact, newly had the General arrived here as the said high post was proposed to him. Horvath answered that he felt very honored by this mark of confidence of the Chinese Government, but was unable to accept it, as he could not give up the management of the railway which had been entrusted to him by the local Russian Government and by the owners of the railway. But the Chinese, by no means discouraged by this refusal, are still insisting that the General should not return to Harbin. It seems sure that they intend preventing him from getting back to his post, perhaps even by force. Between you and me, I am even afraid, in case he in-

not being previously removed from the line. First of all Pompiansky and other representatives of the Vladivostok Zemstvo ought to be sent away, as well as the leaders of the "Conference" and other illegal unions, which would at once restore order on the whole line, the greatest part of the workmen and employees being positively against all trouble, but unable to resist the minority that is terrorizing them. This the Chinese authorities should be induced to do. Much has been spoken here lately about the activity of your troops on the C. E. R.—for my sake, I was eagerly watching this activity hoping it would lead to the desired end, i. e. to the stopping of the Chinese machinations. Am I right in thinking so? Will your Government give the General the necessary support without which he can't resist the Chinese?—Do you think the Interallied Committee which seems still to exist could be induced to do something to stop the Chinese aggression? I wish I could have your advice on this matter as quickly as

possible. Horvath and self, we paid yesterday a visit to your minister. The General explained briefly the situation and Mr. Obata said he would be glad to give his support, but owing to the difficult position of your Government in China he would like that some other Allied representative should take the lead in this matter. I heard to-day that Mr. Bopp, the French Minister, had already handed to the Wai-Chiao-Pou a written protest insisting on the convocation of a general meeting of the shareholders of the C.E.R. We will see to-morrow Mr. Alstone, will ask also for his assistance.

Meanwhile the news we get from Harbin show that nothing had changed there so far, though the Chinese authorities seem to have been rather impressed by the activity of your troops. As for Chang Tso-jin, I was told that he has not changed his mind, believing that your Government has too much to do in its own country to engage into some active policy in Manchuria. At Harbin the Chinese authorities have cancelled the

independently of the other two, as purely local authority, under the protection of your troops. But he could not give me any further details.

You know how anxious General Horvath is to coordinate his policy with yours. So both we would be very much obliged, if you would let us know your opinion about Ivanov-Rinov's statement and let us have the necessary directions. Surely the Zemstvo will never be able to govern the country, as they are only a screen to the Bolsheviks, and the safest would be to intrust the power to some experienced and reliable administrators. But then a good choice ought to be made and the respective persons should have forthwith the full support of your Government, not only in military, but also, if not chiefly, in economic and financial respects.

But it is time to finish my endless letter. Excuse my having given you so much trouble and believe me as ever.

Yours very sincerely,

resolution of the municipality giving to a Japanese Company the concession for construction of tramway.

The last news we got from Transbaikalia shows that your troops have co-operated with General Voitenovsky's detachments against the Bolsheviks. This makes me think that the idea of withdrawing your troops from that province has been presently given up, perhaps in connection with the recent events at Vladivostok and Niklisk. Voitenovsky seems to have started an offensive movement against the reds in the directions of Verkhneudinsk and Sretensk, his troops having had time to recover. General Ivanov-Rinov who is now in Peking believes that soon in the three Far Eastern provinces, i.e. the Ussuri, Amur and Transbaikai, a clean sweep will be made of the Bolsheviks. He spoke to me of a large scheme that seems to be planned at Chita and which, he thinks, has the approval of your authorities. According to this scheme, in each of the three provinces a Governor-General has to be appointed who will act

(Signed) W. Klemm

P.S. April 25th. General Horvath wants me to go to Harbin to prepare the necessary accounts and other papers for the meeting of the shareholders of the C.E.R. I am leaving Peking on Tuesday next.

四二六 五月二十九日 山梨陸軍次官ヨリ
浦潮派遣軍參謀長宛(電報)

極東政權ノ統一ヲ図ルヲ要スルニ付セメノフ
ノニ特別援助ヲ為スヲ得ザル旨回訓ノ件

浦參謀四五五返

極東政權ヲ統一セシムル為ニハ浦潮政府ヲ基礎トシテ「セメノフ」ヲ包含セシメ又「ウエルフネ」政權ヲシテ之ト合同セシムルヲ緊要トスルヲ以テ目下ノ情況ニ於テ「セメノフ」ノミニ対シ從來ノ如キ特別ノ援助ヲ為スハ其ノ目的ヲ達成スル所以ニ非スト信ス從テ「セメノフ」軍ニ対スル兵器供給ハ行ハズ

五二七 七月四日 内田外務大臣ヨリ
在浦潮松平政務部長宛(電報)

セメノフ軍ニ対シ我陸軍ヨリ旧オムスク政府

向ノ小銃ヲ交付セシ旨通報ノ件

第一〇二号

元「オムスク」政府ニ供給ノモノニシテ予テ陸軍ニ於テ保管シアル小銃四万六千五百九十挺今回露国大使ノ要求ニ依リ陸軍ヨリ「セメノフ」軍ニ交付セル旨陸軍省ヨリ通知アリタリ御参考迄

五二八 七月十五日

在チタ中岡陸軍中佐ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

セメノフヨリ日本軍ノ後貝加爾州撤退延期懇
請ノ電報ヲ我皇太子殿下ニ伝達方依頼アリタ
ル件

知多第九六九号

(七月十七日外務省写接受)

「セメノフ」ハ七月十二日皇太子殿下ニ電報ヲ捧呈センコトヲ小官ニ依頼セリ依テ我カ皇族ハ一向政治ニ参与セラレズト答ヘタルニ尚伝達ヲ乞ヒシヲ以テ之ヲ陸軍大臣ニ伝達スヘキ旨答ヘタリ其ノ要旨左ノ如シ(全文後報ス)
日本軍ノ後貝加爾州撤退ハ過激派ノ東進トナリ其ノ結果過激派ト支那トノ接近、朝鮮ノ独立、日本国民ニ対スル過激派ノ宣伝等露国及露人ノ不幸相次テ到来スヘキニヨリ日本

軍ノ撤兵ヲ延期シ此ノ処四ヶ月ニテモ過激派軍ト奮闘中ナル露軍ヲ支持セラレンコトヲ陛下ニ上奏セラレンコトヲ国民ノ名ニ於テ願ヒ奉ル

(次長、次官、軍スミ)

五二九 七月二十一日

在チタ黒沢陸軍大佐ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

セメノフ来訪ノ上チタ保持ノ決意ヲ披瀝シタ
ル件

知多第九七六号極秘

(七月二十六日外務省写接受)

二十一日「セメノフ」ハ当方ヲ訪問セリ

其ノ一、「セメノフ」ノ談ノ要旨

成ルヘク永ク知多ヲ保持スルニ決セリ其ノ主ナル根拠ハ「ブンピヤンスキー」トノ会談、「ザウオイコ」ニ托セル浦塩過激派有力者「ヤコーエンコ」ノ伝言、軍隊ノ大部ノ意向、後貝加爾住民ノ希望、避難民ノ他地方ニテノ生活難、今回ノ停戦ノ利用等ナリ、差当リ「ブリヤート」義勇兵ノ募集ヲ継続シ且部隊掌握ノ方法ヲ講ス
二、右ニ対シ師団長ハ深く可否ヲ論スルコト無ク左ノ要旨ニテ返答セラレタリ

(イ) 知多ノ保持ハ政治的意義ニ於テ有効ナルモ「オムスク」ノ撤ヲ踏マサル為周到適確ナル内閣ヲ必要トシ且軍隊ノ兵力ヲ減少セサルノ手段ヲ要スヘシ

(ロ) 日本軍ハ別命ナキ限り撤退ヲ断行ス

(ハ) 露軍上級將校中悲觀的論者ヲ見ル注意ヲ要ス

三、第一項ノ詳細ハ別電ス又日本軍ノ撤退計画及ヒ之ニ関聯スル事項ハ明二十二日文書ヲ以テ「セメノフ」ニ通知スル筈

(次官、次長、軍スミ)

五三〇 七月二十四日

在チタ黒沢陸軍大佐ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

セメノフガ全軍団長ト協議決定セル作戰方針
ヲ我第五師団長ヲ来訪ノ上通報シタル件

チタ第九八四号 (七月二十七日外務省写接受)

本二十四日第五師団参謀長ヨリ軍参謀長宛左ノ如ク打電セリ左記極秘

「セメノフ」ハ新決心ニ基キ軍団長全部ヲ集メ討議ノ結果本二十四日午後師団長ヲ訪問シ左ノ要旨ヲ告ケタリ

一、敵ノ圧迫ヲ受クル迄ナル可ク「チタ」保持ノ目的ヲ以

一一 反過激派關係雜件 五三〇 五三一

テ一部ノ軍隊(乗馬隊及裝甲列車)ヲ「チタ」附近ニ位置セシム

二、西方ノ敵カ停戦条約ヲ破リ前進ノ場合ヲ願慮シ「オロワンナヤ」南方地域ニ特別支隊ヲ位置セシメ必要ニ応シ西方ニ向ッテ行動セシム

三、策源根拠地ヲ「ボルヂヤ」附近ニ移ス

四、「ネルチンスク」方面ニアル第二、第三軍団ノ主力ハ陸路行軍ニ依リ逐次南方ニ「オノン」河(「オロワンナヤ」方面)流域ニ至ラシム

右ノ計画ニ対シ各軍団長ハ其部下ノ意思ヲ斟酌シ協力「セメノフ」ノ下ニ奮闘ス可キヲ言明シ各自軍隊ニ対スル命令ニ「セメノフ」自身ノ名ヲ以テセラレンコトヲ請ヒタリト然レトモ「ロフウィツキー」ノ去就未タ明カナラス尚前記決心及計画ハ改メテ公文書ヲ以テ通知シ来ル筈ナルカ本決心ニ伴ヒ「セメノフ」ハ情況上若干日前撤兵ノ終末日ヲ指摘セラレ度キ旨申出タリ此件別電ス

五三一 七月二十五日

在チタ黒沢陸軍大佐ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

日本軍ノ撤兵延期ニ関スルセメノフノ請願ニ

六四七

付報告ノ件

チタ第九八四号別電極秘 (七月二十七日外務省写接受)
日本軍ノ撤兵延期ニ関スル「セメノフ」ノ請願要旨
日本軍ノ後貝加爾撤退後モ予ハ「チタ」ヲ保持スルニ決セリ
リ之カ為軍隊ノ移動結束ノ時日ヲ必要トス加之浦潮ニ於ケル
ル代表者會議ノ極東政情安定ヲ良好ニ行ハンカ為ニ暫ク我
軍隊ノ「チタ」以西ニ存在スルヲ要シ之カ為日本軍ノ存否
ハ多大ナル影響ヲ有スルヲ以テ為シ得レハ其撤退ヲ約一ヶ
月間延期セラレ度少クモ最後ノ日本軍隊ハ八月末ニ「チタ」
ヲ撤退スル如ク特別ヲ以テ延期方ヲ取り計ヒ願ヒ度シ実ニ
浦潮會議ノ終了迄ハ日本軍ノ撤退ナカルヘシトノ信念ヲ有
スルコトガ予ノ決心ニ大ナル影響ヲ与フルモノナルニ付茲
ニ改メテ懇願スル次第ナリ
以上ノ歎願ニ対シ師団長ハ八月末迄ノ延期ハ困難ナランモ
若干日最後ノ部隊ノ「チタ」撤退延期ニ付テハ考慮スル旨
答ヘラレタリ

五三二 七月二十八日 浦潮派遣軍参謀長ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

我派遣軍ハセメノフ軍ノ情况如何ニ不関チタ

面撤退ノ円満ヲ期スルト同時ニ為シ得ル限り妥協統一ノ成
功ヲ企図シツツアリ

五三三 八月十日 在チタ黒沢陸軍大佐ヨリ
福田参謀次長宛(電報)

セメノフ八月十二日チタ撤退ノ予定並我機關
主力ノ東方移動ハ八月十四日ノ予定ナル旨報

告ノ件

知多第一〇三一号極秘 (八月十三日外務省写接受)
「セメノフ」ノ知多撤退ハ暫時延期ノ旨報告セシカ浦潮代
表者ト充分打合せノ結果「セメノフ」ヨリ代表者ヲ「ウ」
市ヘ派遣セザルコトトナリ又「オノシ」以東ノ軍隊ノ集中
モ略予定ノ如ク進捗セル為「セメノフ」ハ予定ノ如ク部隊
掌握、編成替等ノ必要モアリ愈々明後十二日知多ヲ去ルコ
トトナレリ爾後「ブ」政権「ウ」政権等ノ態度ニヨリテハ
或ハ時トシテ知多ニ至ルコトアルヘシ尚当機關主力ノ東方
移動ヲ十四日ト予定ス加納大尉ヲ「セメノフ」ト共ニ同行
セシムル筈

軍、佐々木濟ミ

撤退実行ノ意向ナル旨報告ノ件

浦参謀第五九四号

一、「セメノフ」ハ我「チタ」撤退ノ遂ニ動カスヘカラザ
ルヲ確認セシ以来頗ル狼狽ノ色アリ殊ニ最後ノ処決ニ関シ
高級將校トノ間ニ意見合ハズ最近愈々自己ト意見ヲ異ニス
ル軍司令官「ロフウィツキー」中將等ヲ免黜シ成シ得ル限
リ「チタ」ヲ保持シテ妥協會議ノ結果ヲ待ツヘク決心スル
所アリシカ今又之ヲ變更シ主力ヲ以テ「オノシ」以東ノ地
区ニ撤退セントスルカ如ク各政庁機關及軍需品ノ輸送ニ充
ツヘキ多数列車ノ配給ヲ我ニ要求シタリ

二、軍ハ「セメノフ」軍ノ情况如何ニ拘ラス「チタ」方面
ノ撤退ヲ円滑ナラシムル為万全ヲ期シ第五師団長ヲシテ
「セメノフ」ニ対シ其軍隊ノ行動力決シテ我撤退輸送ニ悪
影響ヲ及ボスコトナキ様要求セシメ一方武市特務機關ヲ督
励シ当該地方政権ト接触ヲ密ニシ「セメノフ」ニ対スル輕
挙妄動ヲ抑制シ以テ過軍ト当方トノ間ニ交換セル停戰議定
書竝覺書ノ精神ヲ行ハシムル如ク徹底セシムルニ努メ又特
ニ井染大佐等ヲ「ウ」市方面ニ派遣シ各方面特務機關ノ活
動ト相俟ツテ前記議定書竝覺書ノ実行ヲ監視シ第五師団方

五三四 八月二十三日 在瑞典国烟公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

セメノフノ赤軍勤務願出ニ関スル莫斯科新聞

論評ニ付北田報告ノ件

第一五〇号 (八月二十六日接受)

北田ヨリノ來電ニ依レバ莫斯科過激派新聞「プラウダ」及
「イズヴェスチヤ」ハ八月拾五日「アタマン、セメノフ」
ニ関シ大要左ノ通り論ゼリ

西比利亞革命委員會ヨリノ電報ニ依レバ「セメノフ」ハ極
東共和国大臣ヲ通ジ「トロツキー」ニ対シ從來ノ罪ヲ謝シ
赤軍ニ勤務ヲ願出タリ彼ノ過激派ニ対スル真情ハ不明ナル
モ同人ハ今日迄最モ頑強ナル反革命者冒險家トシテ知ラレ
タルガ最近日本ガ彼ニ対シ「チタ」ヨリ撤兵ヲ要求シタル
際同人ハ日本皇太子殿下ニ対シ歎願書ヲ奉リシモ何等ノ効
果ナカリキ「セメノフ」ノ公的性格ハ我等ニ多クノ興味ヲ
与ヘザルモ同人ノ降服ハ一、白軍ノ主義ガ今日ノ時代ニ適
セザルヲ表明セルコトニ「セメノフ」ガ(不明)極東共
和国ニ頼ラズ莫斯科政府ニ臣事セントスルハ同政府ノ偉大
ナル実力ガ同人如キ放胆ナル反革命主義者ヲモ感動セシメ

タルコトヲ示スモノトシテ頗ル重要ナリ今ヤ吾等ノ敵ハ「ウランゲル」アルノミ仏国ハ同人ヲ承認シタルモ同人ヲ救フコト能ハザルベシ

註 北田ハ在瑞典公使館三等書記官、大正八年五月「レヴァル」及「リバウ」へ出張ヲ命ゼラル

五三五 九月四日 警視庁ヨリ
外務省宛

セメノフガ爆弾ヲ投ゼラレタリトノ新聞報道
ハ誤伝ナル旨瀬尾セメノフ軍顧問談話ノ件

外秘乙第二九号

客月三十日セメノフ將軍齊多停車場ニ於テ爆弾ヲ投ゼラレ足部ニ負傷シタル如ク新聞号外等ニテ報道セラレタルガ右ハ誤電ニシテ事実ハ同將軍ガ客月十六日齊多發ニテ約二百哩東方ナル「ダウリヤ」方面ノ戦線整理ノ為特別専用列車ニテ出發シ整理終了後同二十八日齊多停車場ニ到着ノ際貨物列車ト衝突シテ兵卒駅員等約十名ノ死傷者ヲ出シタルモ同將軍ハ微傷ダモ無カリシナリ右風評ハ吉林都督ガ之ヲ北京ニ誇大ニ打電セル結果ナリト目下滯京中ナル「セメノフ」軍顧問瀬尾ハ語レリ

ナサザレバ露国民ハ今日ノ不安ニ陥ラザリシナラシニ日本ノ為西比利亞ニ於ケル反過激派ハ其ノ政策ヲ誤ラレタリトナシ我ガ對露政策ヲ非難シ居レリ

一、西比利亞ニ於テ緩衝地帯ヲ設置シ又ハ日本ガ妥協握手セントスル各臨時政府ハ凡テ過激派ニシテ彼ノ尼港慘虐ノ張本人「チェリヤー・ピチン」「ウエルフネウジンスク」政府ノ首領「クラスノシチョコフ」ハ何レモ亦同類ナリ此ノ如キ残忍極マル過激派人物ヲ相手ニ妥協ヲナサントスルガ如キハ歷史上ノ權威アル我ガ国体ヲ解セザルモノト謂ハザルベカラズ殊ニ朝鮮問題或ハ国内思想問題ニ對シ嚴重ナル取締ヲナシツツ一方ニ於テハ過激派ト握手セントスル如キハ矛盾モ甚ダシト云フベシ過激思想ヲ防ガントスレバ先ヅ西比利亞ノ過激派ヲ全滅シ然ル後国内ノ危険思想ヲ防止スルニアラザレバ何等効果ナカルベシ

一、日本政府当局者ハ「セメノフ」將軍ニ對シ日本ノ對露政策ガ斯ク変更サレタル以上ハ他ニ良策ナケレバ外国ヘ亡命セラレテハ如何ト勸告ヲナシタリトノ説アルガ同將軍ハ從來ノ關係上日本ニ對シ深キ感謝ノ念ヲ懷キ居リ今日仮令日本ガ援助ヲ打切ルトモ又如何ニ過激派ヨリ压迫

五三六 九月六日 警視庁ヨリ
外務省宛

チタヨリ帰朝ノ瀬尾及森並セメノフ軍用達松
本ノセメノフ及西比利亞ノ現況ニ関スル談話
通報ノ件

外秘乙第三〇二号

セメノフ軍ニ関スル件

過般「チタ」ヨリ帰朝シ目下東京ステーション、ホテルニ滞在中ノセメノフ軍顧問瀬尾榮太郎ノ談

一、後貝加爾地方住民ハ従前日本軍ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表シ敬愛シ居タルモ撤兵後ハ日本軍ニ對スル反感著シク増加セリ之レ要スルニ最初日本政府当局者ハ西比利亞ニ於ケル反過激派ヲ援助スル旨ヲ宣言シ且ツ事實ニ於テ援助シ来リシヲ以テ反過激派ノ露国民ハ此ノ武士道的精神ニ信頼シ居レリ然ルニ我國對露政策一變シ從來援助シ来リシ反過激派ニ對シ冷淡ナル措置ヲ執リシノミナラズ却テ過激派系ノ「ウエルフネウジンスク」及浦塩政府等ト妥協シ全西比利亞ヲ赤化セシメントスル如キ拙策ヲ執レリ斯ノ如キ不徹底ノ援助ヲナスガ如キハ最初ヨリ援助ヲ

セラルルトモ身心ノ有ル限りハ決シテ赤化セズ又万一他国ニ避難スル已ムナキ場合仮ニアリトスルモ日本ヘハ決シテ渡行セズト称シ居レリ

セメノフ軍及西比利亞ノ現況ニ関スル件

一、客月二日齊多ヘ赴キタル森猛熊氏ハ昨二日帰京セシガ「セメノフ」軍及西比利亞ノ現況ニ就テ左ノ如ク語レリ「セメノフ」將軍ハ我軍撤兵ト共ニ現場ヲ維持スル事困難ナルヲ悟リシ為カ去ル八月十五日齊多ヲ撤退シ「ダウリヤ」ノ兵營ニ其ノ本拠ヲ移シ「チタ」ニハ「カツペリー」軍中僅カノ兵ヲ残留守備セシメ在リ現在將軍部下ノ兵力ハ「カツペリー」軍ト合セテ貳万ニ足ラス従前ハ部下ニ閱歷手腕ヲ有スル將官及政治家等多數アリシガ此レ等ノ人物ハ我軍撤兵後ハ「セ」軍ノ前途望ナキヲ觀取シ種々ナル口実ノ許ニ他國ヘ旅行シ現在ハ曩ニ我ガ邦ニ派遣セラレ客月初旬帰国シタル「スキロポイヤルスキー」少將独リ忠実ニ勤務シ居ルノミ其他ハ言フニ足ラズ而シテ「セ」將軍ハ過激派ニ對シ攻勢ヲ執ルガ如キ事ナク單ニ防禦スルニ過ギズ徐ニ時局ノ推移ヲ傍觀スルノ状態ナリ

- 一、去月中旬「セ」將軍ハ「カルムスカヤ」ニ於テ「ウェルフェウジンスク」、浦塩兩臨時政府代表者ト會議ヲ開キ極東統一問題ニ関シ協議シ一方「タスキ」等ヲ浦塩ニ派遣シ又「ウェルフェウジンスク」臨時政府ヨリモ「シャートフ」ナルモノヲ派遣シ同一問題ニ関シ協議シツツアル筈ナレバ或ハ西北比利亞ニ於ケル各政府ノ妥協成リ極東統一問題モ近ク其ノ実現ヲ見ルニ至ルヤモ知レズ
- 一、「ウェルフェウジンスク」政府代表者「シャートフ」ハ極東統一問題ヲ兼ネ目下「イルクツク」西方ニ在ル独逸俘虜約三萬人ヲ浦塩經由本国ニ送還セントシ其輸送方法ノ協議等モナスベク過般七輛ヨリ成ル特別列車ヲ組織シ之ニ護衛兵多數ヲ随ヘ浦塩ニ赴キタリ
- 一、「ブラゴエチンスク」政府ヨリ去月中物品購入ノ為哈爾賓ニ在ル某日本商店ニ供給方ヲ申込ミタルモ日本商人ハ過激派ニ對シテハ物品ヲ供給セズトテ拒絕シタレバ購入委員等ハ日本商人ヲ罵倒シタル後支那商人ヨリ約十五万円余ヲ購入シタル趣ナリ
- 一、帝國ホテル滞在元「セメノフ」軍用達輸出入貿易松本商会主松本世ノ談

- 一、余ハ今回政府命令ニ基キ同胞七百余名ト共ニ齊多ヲ引揚ゲタル一人ナルガ今回俄カノ引揚ニ付約廿万円ノ損害ヲ受ケタリ同地居留民全部ノ損害高ヲ合算セハ約三百万円ニ上ルヘシ從テ今回ノ引揚ニ付西北比利亞各地ニ散在スル邦人ノ損害高ハ千万円位ニ達スルト見テ差支ナカルベシ余ハ東京ニ約一週間滞在後郷里北海道ニ赴キ更ニ哈爾賓ニ向フ筈ナリ
- 一、目下本邦ニ渡來セル瀨尾榮太郎ハ格別重要任務ヲ帶ヒ居ルモノニアラザルベシ而シテ「セメノフ」部下ト稱シ居ル軍人等ハ何レモ重大ナル任務ヲ帶ブルモノナキガ如ク寧ロ旅費ヲ受ケテ外國ニ渡航シ自國形勢ヲ觀望シ各々自決ノ策ヲ講スルモノト見ルヲ當レリトス
- 一、「セ」將軍ハ「ダウリヤ」及第一線タル「チタ」間ヲ往復シ居リ人氣旺盛ナリ反對者側ハ何ト評スルモ將軍ハ目下三万ノ軍ヲ擁シ「ザバイカル」ニ於テ勢力尚隆々タルモノナリ然レトモ將軍ノ部下ニハ格別獻身のニ活動スルモノナク何レモ自己利益ノミヲ主眼トスル輩多ク假令同將軍如何ニ多額ノ金員ヲ抱持シ居ルモ無忌蔵ニアラザレバ將來来ルベキ彼ノ運命ハ没落ノ外ナカルヘシ從來

「チタ」附近ニ於テ「セ」軍部下ハ勿論露國人ハ日本軍ガ援助セルヲ以テ英、仏、米ハ声ノミ大ニシテ実力ナシト見縊リ居リタルモ今回日軍ガ外國側ノ圧迫ノ為從來ノ方針ヲ變シ撤兵シタルヲ以テ今ハ却テ日本ノ意氣地ナキヲ輕蔑シ居ルノ狀況ナレバ從來費シタル多額ノ費用及犠牲ヨリ得タル利権ハ悉ク喪失スル結果トナリ遺憾至極ナリ

- 一、單リ對露政策ノミナラズ日本ノ外交不振ハ外交官其者ノ罪ニアラズ各国外交官ハ官民ヨリ多額ノ金員ヲ附与セラルル故ニ充分手腕ヲ振ヒ國威ヲ發展スルノ機會充分ナルモ日本外交官ハ其財源貧弱ナリ故ニ外交不振ハ当局者ノ罪ナラズ國民モ又与テ罪アリ外交官ヲシテ手腕ヲ振ハシメント欲セバ之ニ充分ノ費用ヲ供給スルヲ要ス陸軍側特ニ參謀本部側ハ財源豊富從テ其活動見ルベキモノアリ故ニ各地ニ於テ往々文武官ノ衝突ハ一ハ外交官ノ動作不振柔弱ト一ハ陸軍側ノ活潑動作ト相容レザルニ起因ス宜シク日本当局者ハ何レモ相互間ニ充分ノ諒解ヲ有シ國威發展ヲ計ル方法ヲ講スルハ急務ナリ

- 一、而シテ過激派ノ活動ハ印刷物ニ物資ニ有ユル方法ヲ以

テ宣傳シツツアリ目下英、仏、米、支那、印度、朝鮮等ニ其惡辣手段ヲ擴張シツツアリ其ノ勢力多大ナレバ我日本モ充分注意ヲ要ス

- 一、日本内地ニ於テハ一部野心政治家又ハ學者等売名のニ労働者其他ニ對シ過激派の宣傳ヲ為シ或ハ印刷物發行等ハ実ニ寒心ノ至リナリ彼野心家ヲシテ一度露國ニ至ラシメ過激派実況ヲ見聞セシムルハ大清涼劑ナリト思料ス
- 一、過激派取締ニ就テハ充分ノ方法ハ講ゼラレ居ル所ナラシム余ハ宜シク露國國情精通セル人士ヲ多數使用無遺憾取締ヲ為スヲ必要ト考フ云々

五三七 九月十日 在ハルビン松島總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

セメノフニヨルチタ地方國民議會召集ニ関スル件

第六二五号 (九月十一日接受)

在「チタ」地方國民議會ヲ「ダウリヤ」ニ招致ノ件ニ関シテハ「セメノフ」ト同議會トノ間ニ爭議アリ議會側ハ真ノ民主的議會ハ現下ノ狀況ニ照シ「チタ」ニ開クニアラザレバ成立セズト主張シ「セメノフ」モ遂ニ同議會ヲ「チタ」

ニ招致スルニ至レリ八月二十八日ノ會議ニ於テ「セメノフ」政府ノ真相トシテ「シロボヤルスキー」ハ「セメノフ」ノ名ニ於テ(一)從來幾多ノ事情アリテ「セメノフ」ハ吾人ガ今取リツツアル新方針ヲ實現スル能ハザリシコト及(二)「セメノフ」ハ行政權ノ全部ハ之ヲ議會ニ譲リ全力ヲ尽シテ議會ノ事業ヲ援助スヘキコトヲ声明セリ

浦潮代表者ハ曩ニ「セメノフ」ガ「コサツク」頭領トシテ軍司令官タルコトヲ承認シタルモ浦潮政府ハ「ウエルフネ」政府ト共ニ之ヲ拒絶シタリト伝ヘラレ之レト同時ニ「セメノフ」ハ欧露ニ於ケル「ブルシロフ」將軍ノ例ニ倣ヒ勞農政府ノ為ニ活動セントノ意嚮ヲ表示セリトノ報道アル処右ハ果シテ「セメノフ」ノ真意ナリヤ否ヤ疑問ニシテ現ニ「セメノフ」ハ黒沢少佐ノ引揚ニ際シ日本軍撤退後ニ於テハ自分ハ表面上暫ク左党ト提携スルノ風ヲ装フノ外ナカルヘシト語リタル趣ナリ

右北京、松平へ転電セリ(長春中継大正九年九月十一日)

〇、一〇)

五三八 十月二十六日

浦潮派遣軍參謀長ヨリ
山梨陸軍次官宛(電報)

等異存ナシ要スレハ日露議定書ノ一部ヲ變更シ日本軍駐屯地方ニ置クモ差支ナシ但シ日本軍憲力率先シテ同兵団招致ノ為斡旋スル能ハズ

二、日本ハ今ヤ極東露領統一緩衝国成立ヲ待チツツアリ若シ此ノ統一緩衝国カ事実上非共產主義ノ国家ナラバ日本ハ之ト親善關係ニ進ムヘキモ何等カノ理由ノ下ニ共產主義ヲ実行スルニ於テハ日露双方ノ衝突ハ之カ為ニ遂ニ免レザルベシ此ノ際共產主義ト戦ハントスル露人団体アラバ日本軍ハ之ト共同シ其ノ支持ヲモ亦辞セザルヘシ然レ共今三州既ニ緩衝国ノ出現ヲ予想シアルニ拘ハラズ今俄ニ非共產主義ノ特別ナル一団ヲ支持スルコトハ不可能ナリ但シ露人自ラ之等準備行為ヲナスモノニ対シ日本軍ハ特ニ妨害ヲ加フルコトナカルヘシ

三、日本軍ハ今尚現臨時政府ヲ基礎トシ精神的ニ之ヲ支持シアリ之レ親善ノ継続スル限リ政変ニ際シテハ現政府ヲ支持スヘキモ日本軍ハ其ノ駐屯地域ニ於テハ絶対ニ共產主義ノ実施ヲ許サザルヲ以テ臨時政府ガ共產主義ニ変ルカ又ハ之ヲ準備スル一団体アル時ハ断然武力ヲ以テ之ヲ崩壊スヘシ

ボルツィレフ中将来訪シテ極東露領政府ニ対スル日本軍ノ態度ニ関シ質問セルニ付我軍司令官之ニ説明ヲ与ヘタル件

浦參謀七七七

二十五日中将「ボルツィレフ」軍司令官ヲ訪ヒ今ヤ知多地方ノ不祥事件ニ依リ「ウ」市政府ハ事実上後貝加爾黒竜二州ヲ合セ尚日本軍撤退ト共ニ黒竜軍ヲ哈府以南ニ進入セシメ同地方ヲモ亦「ウ」政府ノ支配下ニ入レントシ僅ニ南部沿海州ノミ孤立ノ状態ニアリト前提シ概要左記諸件ニ付軍司令官ノ意見ヲ問ヒタリ

一、「カツペリー」兵団ヲ沿海州ニ招致セントスルモ日本軍ノ態度如何

二、南部沿海州ニアリテ飽ク迄過激派主義ニ對抗セントスル一団体アリト假定シ之ニ対スル日本軍ノ關係如何

三、浦潮ニ政変起リ地方ノ不秩序ヲ来ス如キ場合ニ対シ日本軍ノ之ニ対スル処置如何

右ニ対シ軍司令官ハ大要左ノ如ク意見ヲ述ヘラレタリ

一、「カツペリー」兵団沿海州招致ノ事ハ浦潮政府ノ同意アル限り之ヲ「イマン」以北ニ配置セハ日本軍ニ於テ何

「ボルジィレフ」ガ右ノ如キ重大問題ヲ突然提議スルニ至リシ真相ハ未ダ詳ナラザルモ数日前ヨリ「ロフオエッキー」中將ノ密使「イコンニコオ」少將ハ頻ニ「ボルツィレフ」ト会见シ「ボル」モ亦近ク參謀大佐「ルツコフ」ヲ哈市ニ派遣セントシツツアリテ今回ノ質問ハ之等ニ関シ暗ニ日本側ノ態度ヲ探ラントセシ所ナルカ

次長、済

五三九 十一月六日

在瑞典烟公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

欧露ノ情勢悪化シ近ク国内ニ大動乱起ルベシ
トノ情報報告ノ件

第二六六号

(十一月八日接受)

諸般ノ情報ヲ綜合スルニ欧露ノ情態ハ益々險惡ヲ加ヘツツアリテ饑餓ハ全国ヲ襲ヒ一般ニ勤勞ノ精神ヲ失ヒ伝染病ハ流行シ共產党ニモ不平分子多ク莫斯科及地方ニ於ケル争乱今尚止マズ最近莫斯科ヨリ帰来シタルモノハ何レモ遠カラズ大動乱ヲ生スヘシト観測シツツアリ

右ニ関スル北田ノ詳報左ノ通

「コザツク」不穩ノ為(脱)地方ノ穀物ニ対スル最後ノ望

モ絶エ大都市ノ食料薪炭欠乏ハ愈々甚シク農民モ穀物殊ニ飼料ニ窮シ過激派ノ公報ニ依ルニ平時五千六百万ノ馬匹ハ目下六百万ニ達セズ工業ハ軍需原料尚多少残存シ嚴酷ナル労働強制ヲナスモ荒廢スル一方ニテ赤軍ハ大敗後殆ト東線(?)ハ崩潰セルモ過激派ハ波蘭トノ平和後引續キ之カ再編成ニ著手中ナルカ新旧共產主義者ノ内争止マズ露国一般愈々労働政府ニ大危機迫レリト認メ居タル処(脱) 気分緊張スト云フ十月十六日莫斯科守備隊ノ二箇聯隊ハ靴及被服ノ給与ニ付不満ヲ抱キ戦線ニ向フヲ拒ミ衝突起リ次テ未曾有ノ多数ノ逮捕者ヲ出セルガ旧將校多ク反改革抑圧特別委員長 Diershinsky ハ自ラ莫斯科ノ警備ニ当リ思ヒ切リタル手段ヲ講シツツアリ目下莫斯科ニハ團結強固ナル五万五千ノ武装共產主義者アリ一般人民ハ毫モ抵抗力ナク革命ハ唯軍隊中ヨリ起リ得ルニ過キザルモ既ニ波蘭トノ平和成リ過激派カ目下「ウランゲル」ノ戦線ニハ急ニ増兵スルヲ避ケ居ルヲ以テ軍隊内ニ反抗の氣勢ハ頓ニ衰フヘシト云フ Diershinsky ノ説明ニ依レバ七月以来欧露諸県ニ反過激派組織成立シ協商側ヨリ物質的援助ヲ受ケ「ウランゲル」トモ連絡シ又他ノ帝政復興ヲ目的トスル一団ハ農民及將校ヲ

煽動シ居リシカ Savinskoi 及波蘭ノ間諜モ之等ト協同シ今回ノ赤軍ノ敗北、糧食並ニ対「ウランゲル」新戦争ノ開始等労働政府ノ艱難ヲ利用シ十月二十日ヲ期シ過激派倒壊運動ヲ計画シタルヲ以テ吾人ハ之ヲ防圧スル為先ツ嫌疑者ヲ一掃シ軍隊ノ給養ヲ増加シ都市村落ニ対スル監視ヲ嚴重ニセリト云フ「トロツキー」モ仮令露国人口ノ四分ノ三ハ餓死ストモ残余ノ露国民ハ飽迄世界革命ノ為戦フヘシト宣言セリ

五四〇 十一月十一日 山梨陸軍次官ヨリ
浦潮派遣軍參謀長宛(電報)

セメノフニ対スル一身上ノ保護ニ関スル件

佐々木情報ニ依レバ「セメノフ」ノ情況日ニ非ナルカ如ク見ユ彼レノ一身ニ危険ヲ認ムル場合ニハ從來ノ行キ懸リ上何等カノ保護ノ処置ヲ執ラレタシ此ノ保護ハ兵力ヲ以テ「セメノフ」ヲ支援スルノ意ニアラズシテ単ニ彼レノ一身ノ安全ヲ保護スルニ止ル事ハ篤ト注意アリタシ彼レ若シ日本ニ来ルノ意アル場合ニ於テモ直チニ日本ニ連レ来ル事ハ外交關係上考慮スヘキ余地アルヲ以テ先ツ「ハルビン」若シ止ムヲ得ザレハ関東州ニ連レ来リテ保護スルノ処置ニ出デ

ラレ度本件関東軍ニ予メ打合セアリタシ

註 十一月九日陸軍省ヨリ外務省ヘ協議セル本件電報案ニテハ

「セメノフ」ニシテ日本ニ来ルノ意アラバ之ヲ伴フモ可ナリトアリタルガ外務省ノ「セメノフ」ノ日本ニ来ルコトハ可成之ヲ避クル方可ナラムトノ意見ニ依リ訂正セラレタリ

五四一 十一月二十日 関東軍參謀長ヨリ
山梨陸軍次官宛(電報)

セメノフ軍戦況非ナルニ付武装解除シ沿海州

方面ヘ輸送スル方針ナル旨報告ノ件

関電一六六

石坂電ニ依レバ「セメノフ」軍ノ戦況益々切迫シアルニモ拘ラス「セメノフ」軍ハ武装解除ヲ好マズ斯クテハ遂ニ国境附近ニ於テ潰乱ニ陥ル虞アリ依テ此際同軍ノ健全分子ヲ保存スル為更ニ「セメノフ」モ武装解除ヲ為シ之ヲ沿海州方面ニ輸送セシムルヲ緊要トス支那側ニ於テモ「セメノフ」軍武装解除後ノ輸送ニ就テハ何等掣肘セザル旨言明セリト依テ軍ハ石坂中將ノ意見ニ同意ヲ表シ適宜処置スヘキ旨命セリ

五四二 十一月二十一日 真崎陸軍省軍事課長ヨリ
芳沢亞細亞局長宛

セメノフ軍ノ沿海州ヘノ輸送ニ関スル件

附屬書 右ニ関スル陸軍次官ヨリ浦潮派遣軍參謀長宛電

報案

拝啓別紙電報案ニ対スル御意見至急承知仕度御願申上候

十一月二十一日 軍事課長真崎大佐

芳沢亞細亞局長閣下

(附屬書)

陸軍次官ヨリ浦潮派遣軍參謀長宛電報案

最近「セミヨノフ」軍ノ状態刻々非ナルニ就テハ「セミヨノフ」個人ニ対スル救護ニ関シテハ前電ノ通りナルカ此際其部下団隊ノ将来ニ関シテモ亦人道上帝國トシテ相応ノ措置ヲ取ルノ必要ヲ認ム然ルニ右「セ」軍ノ收容等ヲ帝國自ラ表面ニ立チテ行フハ諸種ノ關係上好マシカラズ殊ニ将来經費上ノ負担ヲ蒙ル如キハ避クルノ必要アル処幸ニ浦參謀第七七七号「ボルドゥイレフ」中將來訪ノ際彼レノ意圖ヲ披瀝セル次第モ有之此際「ボルドゥイレフ」等ノ裁量ヲ以テ「カツペリ」兵団移送ノ名目ノ許ニ「セミヨノフ」ノ全隷下団隊ヲ沿海州ニ輸送セシムルコト然ルヘシト信ス又右

団隊ノ武装ハ之ヲ解除セハ全部帝國軍ノ手ニ於テ哈爾賓附近ニ保管スルコト適當ナルヘシ右御含ノ上至急処置セラレ度

註 本文書余白ニ青木欧米局第一課長兼第三課長ニ依ル左ノ記載

アリ

「セメノフ」ヲ絶対ニ浦潮方面ニ連レ行カズ前電ノ趣旨ニテ始末スルコトヲ条件トシテ異存無キ旨兎王少佐ヘ返答セリ
右前電トハ「セ」ヲ哈爾賓ニテ又已ムヲ得ズンハ大連ニテ保護方ノ件ナリ(十一月二十二日、青木印)

五四三 十一月二十五日

在ハルビン松島総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

セメノフ軍崩壊シ過激派滿洲里ニ達シタル場

合ニ於ケル本邦人ノ過激派トノ通商ニ関シ請

訓ノ件

第六八四号

(十一月二十六日接受)

「セメノフ」軍ノ運命モ既ニ定マリ民主ヲ仮面トセル過激派ノ滿洲里ニ達スルハ近キニアリ從テ過激派トノ通商問題ノ惹起セラルルモ遠キニアラザルベシト察セラルルニ付右ニ対スル帝國政府ノ態度ヲ予メ承知シ置キタシ卑見ニ依レ

ハ邦人ノ過激派トノ通商ヲ公然承認スルコトハ勿論面白カラザルコトナルモサリトテ之ヲ禁止スルニ於テハ支那商人而已利益ヲ壟斷スルコトナルヘキニ付問題ヲ惹起シタル場合ニ保護ヲ与ヘザルコトヲ条件トシテ邦人ノ通商ヲ默認スルコト然ルヘシト思考ス(長春中継十一月廿五日午後一、〇〇)

五四四 十二月七日

内田外務大臣ヨリ
在ハルビン松島総領事宛

露國過激派トノ通商問題ニ付回訓ノ件

欧機密送第一三号

過激派トノ通商問題ニ関スル件

本件ニ関シ貴電第六八四号ヲ以テ御請訓ノ趣了承對露通商問題ニ就テハ聯合國間ニ議未ダ熟セズ帝國政府ニ於テモ目下考慮中ニ有之候処此際私人ガ自己ノ危險ニ於テ行フ取引ハ之ヲ阻止スル限ニアラザルモ我方ニ於テ公然之ヲ声明スルコトハ勞農政府側ニ對スル懸引上未ダ其時機ニアラズト認メラレ候ニ付右様御承知相成度此段申進候也

五四五 十二月七日

在浦潮菊池政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

旧セメノフ、カッペリ軍將兵ノ沿海州ヘノ輪

送ニ関シ紛糾発生ニ付報告ノ件

第五〇六号

(十二月八日接受)

曩ニ滿洲里ニ於テ武装解除セラレタル旧「セメノフ」「カッペリ」軍將卒ハ其ノ家族ト共ニ目下続々東支線ニ依リ当地方面ニ向ケ輸送中ニテ本輸送ハ支那側及東支鐵道側トノ諒解ノ下ニ主トシテ避難民ノ名ヲ以テ実施セラレツツアルモノ如シ既ニ滿洲里ヲ出發シタルモノ三十余列車此ノ内哈爾賓ヲ通過東進セルモノ二十余車「ボグラニチナヤ」ニ到着シタルモノ十余列車ニ達シ之カ為「ボ」駅ニ於ケル線路ヲ閉塞スルノミナラズ同地附近ニ於テ混乱ヲ惹起スルノ虞アリ烏鉄長官「スペンゲル」等ハ予メ此ノ事アラムコトヲ慮リ客月末我野戰交通部長ニ對シ之カ整理ヲ依頼シ来リタルモ我交通部長ハ本件ハ露國側ニ於テ自ラ之ヲ解決スヘキモノナリトシテ之ニ応ゼザリシガ露國交通部長「シチコフ」ハ軍司令官「ボルドゥイレフ」ニ之カ解決ヲ請ヒ「ボルドゥイレフ」ハ自ラ責任ヲ以テ之ヲ軍事輸送トシテ烏蘇里線ニ受入ルルコトトシ之ヲ露國交通部長「シチコフ」ニ命令シタリ「シチコフ」ハ同日之ヲ軍事輸送會議ノ議ニ附シ露

國ノ軍事輸送トシテ一日乃至二列車ヲ標準トシテ之ヲ処理スルコトニ定マリ「シチコフ」ハ「ボ」駅ニ出張シテ本月四日ヨリ之カ実施ニ移リタル処沿海州臨時政府ハ本月五日ノ閣議ニ於テ突然右軍事輸送ヲ否認シタリ然ルニ「ボ」駅ニ出張シタル支那軍憲代表者岳大佐ハ同地ニ於ケル技術部支那委員ノ反對アルニ拘ラズ「シチコフ」ニ對シ九(?)日以内ニ二十四列車ヲ烏蘇里線ニ廻送スヘキコトヲ強要シ武力ニ訴フルモ之ヲ遂行セムト脅威シアリ
右臨時政府ノ処置ハ烏蘇里線及東支接続地点附近ニ於ケル交通ヲ杜絶セシムルコトナリ又右支那官憲ノ態度ハ軍事輸送部ノ決議ヲ無視シ鐵道交通ヲ紊亂セシムルモノトシテ両者孰レモ交通ノ維持上看過スヘカラサル緊切事件ナルニ依リ本官ハ之ヲ当地聯合國鐵道會議ノ議ニ附シ相當ノ措置ニ出ヅルヲ必要ト認メ本月八日臨時會議ヲ開カシムルコトトナセリ